



研究室訪問

文化や社会の価値観が経済発展の速度を左右する。
貧困問題こそが経済学の本来の課題

発展速度や貧困の解消速度は、「価値観」とリンク 文化との関連をどう捉えるかが、 開発経済学の重要テーマ

アジアの多くの国々にとって「経済発展」は国民的課題であり、その実現をめざしてさまざまな取り組みが行われています。ここでいう「経済発展」とは、市場の発展すなわち社会全体の近代化、言い換えれば社会生活における合理性や機能主義の浸透を意味しています。経済学はもともと貧困問題の解決を出発点としていますから、「経済発展」をプラスの概念としてとらえ、それを目標としているのはやむをえないことかもしれません。もちろん「経済発展」=「いい社会」と単純に言い切れないのは、現在の日本やアメリカの社会を見ても明らかなことです。経済発展には良い面も悪い面もあることは周知ですが、いまなお多くの人びとを苦しめている貧困を解消していくためには、経済発展が不可欠であることもまた事実なのです。

経済発展の問題を考えていくとき、「文化」という要素は実は非常に深い関わりがあります。例えば、経済発展の度合いは



市場の発展の程度とも言い換えられますが、その発展速度は国によって大きく異なります。日本のように非常に速く市場が発展した国もあれば、依然としてきわめて緩やかな速度でしか発展し得ない国もあります。貧困削減もまた然りです。経済発展とともに貧困が急速に解消していく国もあれば、貧困が長らく残ってしまう国もあります。

それは何故なのか、こうした違いはどこから来るのかを考えていくとき最終的には人々の価値観や文化という問題に突きあたります。これはもとより優劣ということではありません。文化とは、その社会の構成員である人々に共通な理解や感情、あるいは価値観などをもたらす「意味の体系」と考えられます。したがって社会で共有される労働観や実利的なものの考え方、あるいは物質的繁栄に対する評価等々は、当然経済発展の速度に影響してきます。つまり経済活動を担うのも文化を担っているのも、感情や非合理性をもつ生身の人間という存在ゆえ、文化をどう捉えるかという問題は、開発経済学の重要な側面の一つなのです。

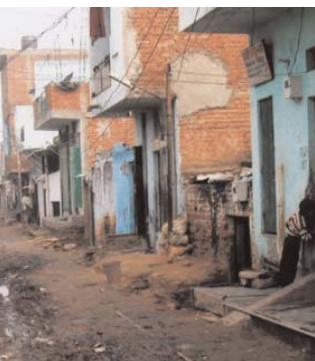
狭義の市場メカニズムだけでは 経済は捉えきれない 視野を広げ、数量化の 困難な要因にも目をむけよう

私がいま関心をもっているテーマの一つに、アジアの工業労働力の近代化の問題があります。文字通りグローバル化が進展している今、アジア諸国が経済発展をなし遂げるには工業化が不可欠であり、この工業化の鍵を握っているのが労働力の質の向上だからです。つまりこのグローバル化の時代、途上国にあ

っては資本設備の導入や経営者や技術者の移転よりも、海外からの移入がより困難な労働力の質の向上の方が、もっと難しい問題だからです。なおその場合労働力の質とは、労務規律の高さだけでなく、持続的に維持可能な労働意欲によっても測られると考えられます。したがってそこでは当然労務管理政策に対する同意だけでなく、職場への帰属感や企業文化への共鳴など、人々の考え方や価値観が大きな役割を果たしています。同時に、勤勉や下積み労働あるいは世襲労働といったものに対する社会の価値観すなわち文化も、また深く関連しています。同質的な社会である日本とは異なり、多くのアジアの国々のなかには階層性や異質性の集合体といった社会も少なくありません。特に経済発展の初期段階においては、異質性が大きければ大きいほど、発展速度もまた減速されがちなのです。

経済学を学ぶ人や関心をもつ人の多くは、合理的行動の経済学に目を向けています。しかし市場メカニズムやその理論は、自然資源の有限性を看過した短期的視座から組み立てられ、かつ狭義の「合理的経済人」の仮定にもとづくものです。私たちはもっと社会の価値観や文化、労働倫理といった数量化の困難なものにも目を向けていく必要があるのではないのでしょうか。経済や社会を研究や調査の対象とするとき、数学的厳密性は重要ですが、その社会に生きている人々の感情や価値観をどう組み込んでいくかも、考えるべき時期にきているようです。

最後に、途上国の経済発展の問題を考えることは、我々自身の生活態度や生き方をも問われていることに他なりません。つまり日本が大量に輸入しているパルプは、森林破壊に繋がっていますし、飽食と無駄の多い我々の生活スタイルは、途上国からの膨大な食料輸入のうえに築かれており、もう少し南北間の分配のメカニズムも考える必要があると思います。(談)



経済研究所教授
清川雪彦
Yukihiko Kiyokawa

1942年生まれ。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位修得。1970年、一橋大学経済研究所助手、助教授を経て、84年から現職。比較の視点からアジアに関心をもち、インドと中国の研究機関と連携し、長年にわたって調査、共同研究をつづけている。趣味の一つは山スキー。緑豊かな塩山に住み自然を楽しむ一方、身近な環境破壊や深刻な過疎の問題にも憂慮。2005年、第95回日本学士院賞受賞

